

昭和の東南海地震体験談

氏名:脇地 茂子(わきじ しげこ)
生年月日:大正 15 年 7 月 28 日
地震を体験した場所:那智勝浦町
当時の家族状況:父、母、弟、妹(2人)



1)地震発生時の状況

当時19歳で自宅は旧国道と田無川のそばにあり、2軒隣の郵便局に勤務していた。地震発生当日、局で勤務中で、地震が揺ってからすぐに入り口のドアを一緒に勤務していた局のお嬢さんと開けに行ったが、揺れている間は開けることが出来ず、机の下に身を隠した。その後家に戻ると家族は皆家にいたが、地震が大きかったので近所の人たちも皆飛び出して来ていた。

2)津波襲来時の状況

当地の人たちは、昔100年ほど前の津波の時は、浦神湾の潮が引いてしまって空になったことを聞いており、又、当時は在郷軍人と言って戦争に行かなかった人たちは街を守る役目をする必要があったので、男の人たちは皆すぐに家を飛び出して海岸に行った。

すると潮がどんどん引いて行っているの、これはきっと津波が来るとの予測から、「津波が来るぞー、津波が来るぞー」と一人が言うとその声は周りに広がった。

両親は弟と妹に早く山に逃げろと、海蔵寺から田無川を挟んで向かいの山に避難させた。両親が、津波が来るから何もかも二階に上げないと、と言うので布団などを上げ出した。

父親がお前は川のそばで潮が来るから見ている、橋が一杯になったらまずいので逃げろと言った。

川の傍に立っていると、だんだんと潮が上がってきたのでしばらくその場にいた。

「潮一杯になって来たよー」と父に報告すると、「わしらは二階に上がっているからお前だけ逃げろ」と言うので、神社の前を通過して海蔵寺に向かって逃げた。

その頃は若かったので、迫り来る波にもさほど怖さは感じなかったし、後ろを振り返りながら走った。その時逃げているのは自分一人だけだった。お寺まで来て、さらにその裏山まで登ると、すでに近所の人たちも避難していた。

波が引いていくときに、寺の奥にあった田無川沿いの4～5軒の家の物が流されて行った。



[現在の浦神湾]

流された家の人たちは「家の物が流されて行くー」とわいわいと泣いていた。津波なんていうものは一生に一度見れるか、見れないかのものなので、よく見ておこうとさらに山の上まで登った。そこからは浦神湾が一望出来、すでに辻本さんというおじいさんが登って来ており、二人で津波の様子を目のあたりにした。

浦神湾は袋みたいになっており、波は対岸(浦神東)の湾の入り口に当時あった畑下造船所まで来ると入り口が狭いので潮が上がって、ものすごく高くなったように思えた。湾は広いので、波は西と東に分かれた。当時は旧国道から浦神小学校まで一本の道がついていたが、波はそこまで突き当たり、まるでナイアガラの滝のように流れ落ちた。山の上からは湾内のどの辺まで潮が引いて行ったかは確認できなかった。山にどのくらいいたかまでは覚えていないが、2波3波と来て、だいぶ治まったので家に戻った。

3) 家族の行動・被害

家に戻ると両親共に元気で、無事だった。弟や妹はまだ山に避難していた。家の中は何もかもでんぐりかえていたが、ほとんどの物は二階に上げてあった。きっと潮が来るまで運び上げられるだけの時間があったのだと思う。潮は座敷のふすまの取っ手の一寸上まで上がっていた。一階の畳がびしょびしょで寝ることができなかった。弟と妹の3人だけ寺に泊めてもらうことになった。寺には1週間ほど寝泊りして、食事のときは家に帰った。

4) 集落・周囲の被害

波が引くときに浦神駅近くの二軒の家と神社(海蔵寺の向かい)のそばの駄菓子屋が流された。流されたといっても家が全部流されたわけではなく、母屋がそのまま移動して置かれたみたいだった。支援物資は何もなかったと思う。当時芋壺と言って、その中に芋を保管していたが、それが流され一個も残っていなかった。

家の鍋も流されたが近くで見つけることが出来、流された芋を拾って来て、洗って炊いて食べたと思う。却ってすぐに避難した人たちは布団などを流されてしまった。

現在の国道 42 号線浦神南信号から田原方面に直線で300mほど若干上り坂になって右にカーブしたところに JR の鉄橋がある。そこにゴミが引っかかっていたので、波はそこまで上がったことになる。

5) 地震・津波後の生活

寺に避難している間もかなり大きな地震が何回も何回もゆった。浦神の海岸に打ちあがった布団や筆筒を拾いに行ってきた人たちもいた。家を片付けるのに大変で人どころの騒ぎでなかった。

被害にあった家がほとんどで、何の支援も手伝ってくれる人もなく、自分たちだけで行うしかなかった。はっきり覚えていないが、2～3日、局の仕事も休ませてもらったかもしれない。

6) 次の災害への備え

枕元に肌着やちょっとした大事なものを入れた袋を置いている。住まいが浮島の森の近くなので、地震が揺ったら高い所にある市役所の方に上がって行こうと思っている。その辺りには旅館や病院もあり、安心である。

7) その他

1946年の南海地震発生時は同じく浦神の自宅におり、地震がゆったのは夜中で、寺には避難したが、2年前の地震で学習済みだったので、そう慌てふためくことはなかった。周りの人たちも落ち着いており、津波もたいしたことはなく、被害もなかったことから大変だったという思いはない。

ただ一人だけ盲目のお婆さんが亡くなったが、何が要因だったかは不明である。